ロマン主義円環理論とM．エンデの *Einer Langen Reise Ziel*

（『ある長い旅の終着点』）

酒　井　明　子

はじめに
一章　円環理論，及びその系譜
二章　ロマン主義における円環理論
三章　Einer Langen Reise Ziel におけるロマン主義的円環の構図
おわりに

はじめに

19世紀初頭のヨーロッパでは，フランス革命以降30，40年で登場した科学的及び文化的側面での目ざましい創造性が，時代の新しい局面を迎えると同時に，知識人達に不安をも与えた。そうした状況は20世紀の我々の時代に共通するものであると言える。その人々は時代的変貌のなかに病弊を見，その核心に人間の断片化，分離，疎外の存在を見た。この人間的な問題への関心と，問題解決への意図と実践において同一の方法を共有していた同時代の人々，つまり，時代精神と呼ばれるものを持った人々が，イギリス，ドイツ，フランスなどの国々に共通するロマン主義者と言われる人々である。

当論では，米国におけるロマン主義研究の第一人者であるM．H．エイ

ブラムスの大書 *Natural Supernatural : Tradition and Revolution in Romantic Literature* (1971)（『自然と超自然ーロマン主義文学における伝統と革命』）[1]に述べられる理論を取りあげ，それによって M. エンデ の最近作 *Einer Langen Reise Ziel* (1992)（『ある長い旅の終着点』）[2]の分析を試み，当作品が如何にロマン主義的手法を意識的に取り入れているかを改めて認識することが目的である。

Natural Supernatural は，ワーズワースの『逍遥』の「序」に発表した「趣意書」（プロスペクタス）を中心にして，それまでの西欧の伝統と，そのテーマを共有して展開する新しい流れをおびただしい文献をひもときながら検証したものである。ワーズワース，コールリッジを中心とするイギリスロマン主義，および，ゲーテ，シェリング，ノヴァーリスなどのドイツロマン主義作家のみでなく，キリスト教神学，新プラトン主義哲学，西欧神秘主義を論じ，ロマン主義文学研究という枠を越えて，西欧文明全体の流れを概観している。

エイブラムスはここで，ロマン主義文学，哲学における特徴を七点挙げている。1．フィヒテ，シェリング，ヘーゲルにおいて準備，展開されていった自己完成への運動の体系。2．神の摂理という神学的な概念に代わる哲学体系の内在的目的論。3．新プラトン主義的キリスト教から受け継いだ統一性の喪失（分裂）と回復（和解）からなる「大いなる円環」。4．未分化のままの統一性でなく，高次の段階における統一性を目指す螺旋上に上昇する円環。5．自己形成（教養，教育）によって完成する個人（及び人類）の歴史に置き換えられたキリスト教的救済の歴史。6．故郷への帰還の旅として表現される自己形成の歴史。7．哲学体系と文学的プロットの相同性と故郷への旅の悲劇的運命である。[3]

全体を通して「円環をなす旅」という概念が主題として貫かれている。当論では，エイブラムズの述べる円環理論の系譜を跡ずけると共に，4の統一性を目指して螺旋状に上昇する円環，5の自己形成によって完成する

個人に関する考え方と，6の故郷への帰還の旅に表現される自己形成の歴史の三点を中心に，エンデの *Einer Langen Reise Ziel* の分析を試みる。

一章　円環理論，及びその系譜

(一)

ロマン主義の思想，文学が西欧文化における決定的転換点であることはよく言われることであるが，その作家達は文化遺産を再解釈しながら，新しい世界を求めるなかで，経験を認識する形式，外的世界の見方，個人と自己，自然，歴史，他者との関係を新しい形で展開した。エイブラムスはその中でもワーズワースを時代の代表的詩人とし，世紀の変わり目に書かれた詩，「プロスペクタス」をロマン主義の中心的意図の表明であったとする。彼は「プロスペクタス」が楽園喪失と楽園回復から成るキリスト教神話をロマン主義的な視座のもとに置き換えたものと捉える。聖書における歴史は楽園喪失に始まり，黙示的結婚により新しい天と地の到来に終わるが，ワーズワースはその過程を人間精神と自然との分離と結合に置き換えているとする。そして，ロマン主義はこうした内在化の過程が頂点に達したものと見る。

伝統的な宗教，神学的な価値は超自然主義的なものとして捉えられるが，この超自然主義的な存在が内在化され，または世俗化されて，ワーズワースにおける自然・人間精神という二項対立の概念が形成されるが，キリスト教が主題としていた創造・堕罪・救済と言う流れは，自然と人間の精神の結合・分離・再統合という関係に置換され，同時にキリスト教が展望していた人類史は，個人が苦悩を経験しながら成長していく自己形成の過程へと置き換えられる。

このように，楽園から出発して楽園に帰る，そして，人間と自然との結合・分離・再結合，と言う始点と終点が連結する「円環」理論が構築される。

(二)

自らの尾を加える蛇＝ウロホロス[4]として描かれるこの「円環」理論による宇宙観は，初めに新プラトン主義哲学の第一人者プロティノスの思想をその弟子プロクロスが体系的に整理したときに円環運動として表現したのに始まる。プロティノスは世界の第一原理を一者とし，一者は善，全ての存在の源泉，最高の形式であると言う根本的一元論を定式化した。この一者から「発出」するものを多性そして悪として捉えるが，同時にこれに対し，「環帰」即ち，源への回帰という逆の過程を配置している。この環帰には人間は外的世界から内的世界へ目を向ける必要があり，その環帰は全ての多性，分割が消え去る合一のエクスタシーにおいて達成される。この一者からの出発，即ち，分裂への運動と，多性からの回帰，即ち，分裂から戻る運動は，善から悪へ行き，再び堕落から善へ復帰することと同一視される。つまり，環帰の方向が終わりから始まりへの方向であり，この方向は全体をただ一つの確定されたものとする意味でより大きな価値が置かれる。

以上のような新プラトン主義による「円環」は，ユダヤ教及びキリスト教神学に引き継がれる。前者による円環運動は無時間的形而上学であるのに対し，人格神を持つキリスト教の救済史は歴史的に有限な存在である故，二者は同一には測れないが，楽園創造を始点とし，終点に王国回復を置くことにより新プラトン主義化された円環構造を見ることができる。人格神としての「主」は新プラトン主義哲学による非人格な一者あるいは絶対性と等しく，エデンの園からの追放は，つまり堕罪は一者からの転落，分離である。人間の存在は常に自己中心性，部分が自己充足的であろうとする事と等しいと見る。受難，再臨を経て，「ヨハネの黙示録」における聖婚は全ての断片化された部分，人間が最初の未分化の状態，神との一体化，に再統合する象徴として捉えられる。従って，個人の救済された生は，その

改心が失われた完全性へと環帰する運動にあたる。つまり，人間の神からの分離は人間の堕罪の結果であり，その救済，神のもとへの回帰はキリストによって可能となる。

さらにもう一点加えなければならないのが，啓蒙思想をにとって代わられるまで長く伝えられた秘教的な考え方である。その主なものはユダヤ教カバラーとキリスト教化されたヘルメス思想である。ヘルメス思想[5]は何世紀にもわたって秘教哲学，錬金術の形而上学的な基礎として存在した。カバラーとの間に互換性がある。その基本的存在論は神人同形説であり，生物と無生物の間に厳しい境界線を引かない。生物のカテゴリーを自然全体に適用し，宇宙を巨大な人間のごとく取りあげる。キリスト教化されたその思想では，世界の創造は世界の堕落に一致する。原初的なアダムは造られた時，自らのうちに宇宙全体を現しており[6]，非物質的な身体を持つ両性具有であった。しかし，彼は堕落して，分離，対立する物質的，性的な要素からなる粗雑な物質世界に転落したとされる。一者への環帰は，堕落した物質世界から霊的世界への変容行という形で可能になる。

錬金術においては，この一つの起源に環帰しようとする固有の運動は，変容と統一化の原理である「哲学者の石」を造り出すことによって行われる。卑金属を分析，精製することによって，金のように完全性を持つ質に変容させるのであるが，その際効力を発揮するのがこの空想上の万能薬「哲学者の石」であった。錬金術の目的は，物質であれ，人間であれ，それぞれが本来もつ完全性を達成することに置かれており，物質的錬金術と霊的錬金術は互換性があった。また，化学的結合は性的結合に等しいものとされ，化学の結びつきは両性具有としての統一体「哲学者の石」を生む。そして，堕落したアダム，つまり，神から分離して孤立し，一断片となった人間が救われるのは両性の属性を結合した完全性の象徴キリストによる恩寵のみであるとされる。「哲学者の石」は「救い主キリスト」に対応するのである。ここにみる環帰に関する宇宙観が自らの尾をくわえるウロボロス

として描かれるわけである。

二章　ロマン主義における円環理論

(一)

啓蒙主義の知的環境，機械論的世界観，二元論などが生身の存在としての人間の基本的経験と要請に満足いくものではないと感じたロマン主義哲学者達は，ルネッサンス時代の絶対的な分割を伴わない完全な宇宙像を求めた。そこは，全てのものが照応関係[7]によって関連し合い，生物は無生物と，自然は人間と，物質は精神とつながっている場であった。ドイツやイギリスのロマン主義的詩人達は，その起源が秘境的結びつきを持つ神話やイメージを自らの作品の中に投影した。そうすることによって，危機に満ちた時代の知的，社会的，政治的な病弊を定義しようとした。また，時代に疎外されていると言う感覚は，自らが真に属する場所を求めて遍歴する放浪者という伝統的な筋を復活させた。このロマン主義的な探求という筋書きは，上述したプロティノス的な往還とキリスト教的な巡礼から異質性を持ちながら，引き継いでいるものと言える。

ロマン主義哲学は衆知のように，フィヒテにより輪郭が示され，シェリングによって展開され，ヘーゲルによって完成されたとされるが，その体系は内的な運動によって自らの完成へと向かう動的な過程として表現される。フィヒテは自我と非我の対立と闘争の関係を総合において解消させることによって，世界の生成の活力を見た。シェリングは主観と客観の絶対的統一性を「永遠の原初的な統一性」とした。それが人間が思惟を行う過程によって解体し，自然と精神の両方の領域において分離した主観＝客観の形式として現れるとする。そして，その主観と客観の基本的対立を終結させ，和解をもたらすために，それを目指す一つの動的衝動の存在を認める。つまり，矛盾を解く鍵として，生産的な芸術家の「想像力」という概念を設置する。「想像力は矛盾を思考し，和解させる能力であると共に，芸

術家の全存在の根源において作用している自然と知性，意識と無意識，主観と客観の間の究極的な矛盾を，ただ一つの活動と産物において結合させることによって廃棄する力である。」[8]

このように，対立する衝動によって想像力を生み，それ自体で展開する理念は有機的な体系であると同時に，ヘーゲルの弁証法によって頂点に達する。即ち，対立は止揚され，同時に廃棄され，保存され，高次の段階に引き上げられる。

言い替えれば，哲学すること，つまり，思惟という行為は一性を多性に分割することであり，分離と共に意識と反省が始まり，精神が自己自身との原初的な統一性（衝動と行為の基本的な調和）を喪失することである。それ故，哲学の基本的な目的は，最初の分離から出発して，その分離を永遠に廃棄し，止揚することだとする。この点を重視するロマン主義哲学は統合の形而上学であると言える。シェリングは全ての哲学は自然と一体化していた状態を想起することにあると述べている。

(二)

ロマン主義は人間，自然，人間の経験をこの世の舞台に移し，人類と個人の歴史を扱う。従って，発出から環帰までの流れは初源の状態ではなく，その間に介在する差異を同化し，高次の統一性に向かう。つまり，円環的な環帰理念と直線的な進歩の理念が融合し，上昇する円環，即ち，螺旋として説明される。人間を文明化し，人間とするものは，彼が喪失した統一性より高次の調和，完全性への憧れである。「典型的なロマン主義の理想とは，文化的プリミティズムとはほど遠く，文化と文明の厳しい道に沿って行われる真摯な努力としての理想である。」[9]従って，ここではプロティノスにおける一者から多性への発出は完全性への下降と見ず，完全性への上昇にとって不可欠の段階として有機的，包括的な多性の統合としてプラスの評価をされている。シェリングは別の論文で，「諸原理の統一は，個々の

作用の無限の多様性を経て，自己自信に帰着するのでない限り，十分なものとは言えない」[10]や，「……統一が関知されるものなら，これはただ特性，分離と衝突を通じてのみ生じるのである」[11]と述べていることからもその意味をくむことができる。

上に述べた螺旋はさらに，人類史及び個人史の比喩で考えると，漸進的自己形成としての救済と捉えることができる。つまり，試練としての経験を重ねる人間存在は，彼岸的な天上界への準備期間としてではなく，意識を持ったときから成熟にいたるまでの人間精神，道徳の自己形成，自己教育の過程とみなされる。人間の生の歩みは文字どおりの救済史(Heilsgeschichte)ではなく，自己形成史(Bildungs-geschichte)になる。「個人としての人間精神は，分割，対立，和解と言う連続する段階を経て完成の段階へ展開する時に経験する苦悩を通して試練を受けるものとされる。」[12]

西欧の伝統において，精神の原理は，「意識」と「認識」によって論じられる。ロマン主義の形而上学も，存在し生起する本質的なことは，究極的には人間意識の「生成」即ち漸進する意識に繋げられる。従って，人間の生の最終目標は人類の意識の最終段階とも言える。シェリングは，人間が認識する世界と自然界が完全に一致し，思惟の世界が自然界と重なるときに，人間の自然との結合がなされると述べる。

螺旋を描いて完全に向かう人間の精神に対するもう一つの見方は，苦難，苦悩，災難を通して目標に向かっていく苦痛に満ちた巡礼の旅として捉えるものである。それは，まず，巡礼と探求としての生というキリスト教の中心的な比喩において考えられる。アダム以降の人間は異国における追放者，旅行者であり，彼の生の道程は厳しい巡礼の旅である。旧約聖書の世界で，40年間の放浪の後についに約束の地にはいるモーゼに率れられたイスラエルの人々がその代表的なものである。エイブラムズはダンテの「神曲」やバンヤンの「天路歴程」における探求の旅をも挙げている。

ロマン主義哲学の意識の自己形成史は，その終点が始点に連なる自己形

成の旅（Bildungsreise）という物語形式によってイメージされる。シェリングもホメーロスの「イリアス」と「オデュッセイア」の例をしばしば挙げ，そこに発出と環帰の典型を見，人間は自然へと出ていくが，それは最後に自分が求めているのは後に残してきたものであることを知るためであるとする。ヘーゲルを引用して，エイブラムズは「苦難に満ちた自己形成の旅の決定的段階において，疎外された自己からの出発の瞬間から迂回，上昇，帰還して，最後に『他の中にいて自己のもとにある（故郷にある）』までの精神の変遷を物語っている」(13)と述べる。ロマン主義文学に登場する多くの人物は未知の何かを求める遍歴者であるが，徐々に始点に戻っていく探求者でもある。

以上，エイブラムズの膨大な理論を中心に，新プラトン主義よりロマン主義の求め続ける遍歴者までの円環理論を跡付けた。次章では，ロマン主義の系譜に連なるとされるM．エンデの作品の中にこの円環理論が実践されている点を指摘したいと思う。

三章　*Einer Langen Reise Ziel* に於けるロマン主義的円環の構図

（一）未知の存在「故郷」

主人公シリル・アバーコムビィ（Cyril Abercomby）は英国エセックスの貴族であり，且つ，ヴィクトリア女王の外交使節ベイジル・アバーコムビィ（Basil Abercomby）卿の一人息子である。父アバーコムビィ卿は職業上，国から国へと常に移動し，二ヶ月以上同じ場所に留まることはない。その卿はシリルを専属の教育係や健康管理人や身の回りの世話係と共に，連れ歩いた。シリルの母親は他の人を愛し，彼を生むとすぐ去った。アバーコムビィ卿は息子の前から母親につながるものを一切消し，シリルにその名前をも聞かせなかった。シリルは複数の他人の大人の中で，万端怠りなく，しかし，家庭の味を知らずに限られた世界で育てられた。彼は「好感を持たせるような子供ではなく，外見的にはもう清純な印象を与えなか

った」[14]としても，「痩せて骨っぽく，色のない髪，無表情で不満を印象づける厚い唇をしていた」[15]としても，不思議ではない不自然な環境を背負っていた。

こうした囲いの中の生活を余儀なくされているシリルは，この物語の展開のキーポイントに位置するある出来事にぶつかる。あるローマのホテルに滞在している時，英語を話す小さな女の子がすすり泣いているのに出会う。シリルが泣いている理由を訪ねると，女の子は答える。

「私たちはもう4カ月も家から離れているのよ。」

シリルが尋ねる。

「そのことはわかったけど，それがどうしてそんなに辛いことなの。」

女の子が答える。

「ただホームシックなの。とてもひどいホームシックなの。」

シリル：「何だって？」　彼は理解できないように尋ねた。

女の子：「ただ，次の船で帰りたいの。」「すぐ帰ることができなければ，わたしは死んでしまう。」

シリル：「本当？」「どうして？」　彼は興味深く尋ねる。[16]

女の子は米国の中性部のどこかにある小さなある場所について話し始める。そこにはお父さんとお母さんが，彼女の小さな弟，妹と，そして歌と面白い物語をたくさん知っている年とった，太った黒人の乳母と，そして鼠をよく捕る子犬のフィップスと共に暮らしている。……特別の苺がなる家の裏の森について，隣りの村に何でも買える店を持っているカニングルさんのことなど……をいきいきと語った。

シリルはこの場面で「故郷 Heim」という言葉に始めて出会い，「ホームシック Heimweh」という心の動きがあることを始めて知る。シリルのそれまでの人生の中では一度も経験したことのない，従って，大きく欠落した概念であり実体であった。それは本文の中で次のように表現されている。

「憧れたり，恋こがれたりできる，ふるさとのような，何かそのようなものを全く持っていないことをうっすらと意識することになった。何かが彼には欠けていた。それは明らかだ。しかし，彼はそれが良いことなのか，それとも，欠落なのかについてもはっきりしなっかた。」(17)

その女の子が生き生きと，輝く目をして語るその「わが家 Zuhause」とは単に自分が生まれた場所というのではなく，現在の住まいとも違う。それはどうやって決まるのか，誰が決めるのか，その価値は聖殿とか宝石のように手につかめるものの中にはない。そうした「価値ある何か」からの疎外感にシリルは耐えられない。そして，自分にも世界のどこかにそのようなものが存在するに違いないという確信を持つに至る。

ここで，エイブラムズの述べる円環構造はシリルの中ですでに成立している。主人公シリルはそれを認識していない，また，作者エンデがそれを意識的に取り入れているかどうかは不明であるが，この作品の読者には自明である。つまり，シリルが求める先にあるものは，自らの生が出発した始点であるからである。これは，エンデが「故郷 Heim，Zuhause」という言葉を提示したときにすでに決定したと言うことができる。エイブラムズは「完成への憧れはしばしば，父母や失われた避難所への＜郷愁 Heimweh＞として表現される」と述べている。(18)ロマン主義作家ノヴァーリスは，その作品「ハインリッヒ・フォン・オフターディンゲン（青い花）」で，主人公ハインリッヒを夢にみた青い花を求めて遍歴の旅に出させるが，その花の花冠にハインリッヒの知るある少女の顔をだぶらせることによって，冒頭から，主人公の内なる探求の旅がすでに円環をなすという予感を読者に与えている。これはエイブラムズの指摘でもあるが，当作品ではさらにその予感は明確であると言える。

同時に指摘できることは，シリルは欠落を意識することによって，精神の分裂，ロマン主義の概念では，全体生の欠如，全存在の部分化に陥る。

（二）自らの所属の場を求める遍歴の旅

父親の死とともに相続した先祖代々の莫大な土地や資産を，周囲の猛反対にも拘らず，米国のある資産家に売り払ったことで，シリルは，英国文化の伝統と尊厳を売り渡したとして，人々から嫌悪の視線を投げつけられるが，無関心に，求める対象を胸に旅を続ける。しかし，徒労に過ぎる何十年という旅の間に，シリルの＜探求＞と名づけた青年時代のナイーヴな期待は消える。「道の長さは期待する到達への距離とは逆比例する。これは人間的努力のイロニーであり，そして期待は最後に失望に変わるから，その意義は常に満たされないということにある」(19)と規定し，神への疑念を大にする。神は久しく信者を待たせたにも拘らず，約束を一度も果たしていないと。期待だけが世界を進行させるのだと。

実現され得ない探求の長すぎる旅は，当然，人間を惰性と失望と不信の存在にする。分裂した精神は，神を呪うことによって，「悪」にさらに下降した存在である。

こうした意味で下降を続けるシリルは，ある出来事によって上昇への道へ転帰する。その特異な性格によって人々から敬遠されているシリルは，あるドイツの商業顧問官に招待される。そして，その屋敷内にある美術蒐集品の中に偶然見い出した一枚の絵によって，シリルの精神は再び激しく揺さぶられる。その絵の前に何時間も立ちすくみ，涙を流し，その絵に促われてしまう。

少し長いがその絵を描写した箇所を取りあげる。

「月も星もないのに，月明かりに照らされた岩の荒野が描かれ，奇妙な形をした山々が広い谷を囲んでいる。その真ん中に，キノコ型をした巨大な，しかし，穴と裂け目が多数入った岩の柱がそびえている。道がないだけでなく，谷底と塔の上を結ぶ階段も，エレベーターもない。塔の上には，無数のさらに小さな塔と円蓋が立ち並び，出窓とバルコニーがあり，乳白

色で半透明色の月光に照らされた夢の城であった。壁がんやテラスの欄干の至るところに，ごく小さな白っぽい人物像がみられる。それらはミニアチュアのように非常に小さかったが，どれも何であるかわかった。幻想的な鎧兜の騎士，花の冠をかぶった妖精達，動物の頭の神々と精霊達，フードを被った罪人達，王冠を被った王達，小人達，身体の不自由な人達，恋人達，輪舞の子供達，老人達，……で，絵を見つめれば見つめるほど，夢の絵のように，次から次へと見えてくるのだった。城の全ての窓は明るく照らされ，中で賑やかなお祭が開かれているようであった。その窓の一つで影絵のように一人の人物が挨拶をするかのように，またはさよならをするかのように手を振っているのが見えた。」(20)そして，この絵の題名には＜ある長い旅の終着点＞と書かれていた。

この絵はシリルの現実の世界からの内的な分裂を，ロマン主義的な統一に向かわせるための「衝動」にあたる。エンデはシリルとその絵との関係をさらに次のように語る。

「この絵は彼にとって全く個人的な，非常に身近かな告知，つまり，まだ彼には理解できないが，彼を揺さぶる明確な力で，それが彼だけのもの，この地球の住民の中で彼だけに決定的なものであると信じられるある一つのメッセージを含んでいた。それはまた，彼の他の誰にも関係のない，何世紀も昔にさかのぼる知らせでもあった。外界では彼は，他の人々が自分の家に対して感じるように，自らが属していると感じるものは何も見いだせなかった。想像や芸術の分野にそれを探すという考えは彼には思いつかなかった。しかし，今，彼は自分だけの秘密に突然，不意に向かい合った。そして，それがよそ者の手中にあり，見知らぬ馬鹿な目でキョロキョロ見られたことを知って，一人の嫉妬深い愛する男が，その恋人が裸で人前にさらされるときに感じるように，シリルは肉体的な吐き気を催した。」(21)

一枚の絵画がそれを見る人に衝撃を与え，ある覚醒を促すという，絵画をキーに使う手法はエンデ作品の得意とするところである。(22)この主人公

に対するメッセージは，同時に作者によるメッセージでもある。当然，その神秘的な谷の中の塔はシリルの終着点であることを暗示している。しかし，それは現実の世界には存在していないかも知れない。つまり，内的な次元でその塔はシリルと関係づけられている。異次元，心象の世界[23]と言い変えても良いかも知れない。しかも，何世紀もさかのぼる知らせであるということは，時間的な推移を越えて，つまり，原初の頃から彼の存在はその谷と結びついていたということを想定させる。従って，内界での存在であることと，原初からの決定であったこととの二点に於いて，即ち，空間と時間を飛び越えて，主人公と結び付けられる対象を提示したことで，この物語の傾向を決定的にしている。シリルに自らに欠落した部分が何であるかが認識できた。彼の向かう方向がより具体的になる。

（三）外界と内界との往来

絵の所有者と，シリルの魂を救おうと，彼に愛情を捧げ尽くした絵の所有者の娘二人の死と引換えに，シリルはついにその絵を手に入れる。自分の所有となったその絵と毎日対峠している内に，シリルは，二次元の構図でしかない絵の中に自らが出入りするようになる。ローソクの窓の明かりの後ろに，描かれていない廊下やホール，部屋，階段を見つけ，昇ったり，降りたりしているうちに，あちらこちらにある家具，貴重品，書物までも見覚えるようになる。彼は「目覚めた夢の中にいるように」感じる，が，「夢見人の空想や気分に全く依存するのではなく，それらのものは，変わりなくそこにあった。」[24]

この部分も，物語の中に入り込んで活躍する先の作品と同じように，エンデならではの手法であるが，主人公が絵に入り込むことによって，外界と内界の結合が図られる。ここで注目すべきは，塔の存在が夢の中や，空想の中で登場するのではなく，主人公の目覚めた感覚の中にあるとあえて述べられていることである。シリルの内なる目と感官に写る実在である。

エンデが強く影響を受けた神秘思想家ルドルフ・シュタイナーがその著書の中で次のように述べている。「内的な感覚が，外界との行き来の中で目覚めさせる霊的なものを，その霊性のなかで把握することを通して，統一の絆はつくられる。」[25]また，「外に木が立っている。私はこの木を私の霊＝精神のなかで把握する。私は私の内なる光を，私が把握したものの上に投げかける。私の内部で，木は外界に存在するもの以上のものになる。感覚の門を通って木から入ってきたものが，霊的＝精神的内容の中に受け取られるのである。木の理念的対応物が私の中に存在する。この理念的対応物は，木について，木が外界で私に言えないことを非常に多く語る。私に照らされることで，木が何であるかが初めて明らかになる。木は外界に存在する唯一の存在ではなくなり，私の中に生きる精神世界の一部となる。」[26]この「木」を絵の中の塔に置き換えると，その塔の持つ意味がさらに明確に浮かび上がってくる。谷の中の城は，シリルの内に生きる精神世界の一部となるのである。

（四）求めよ，さらば，与えられよう

シリルはある町で霧の中を散歩する途中道に迷い，とある中世の狩り人の絵が描かれている古い店に出くわす。そのドアにヘブライ語で，＜探しなさい，されば，見い出せるだろう(Suchet, so werdet Ihr finden.)＞と書かれている。シリルには，遺失物保管所のような所だと思われる。その店の主が，この作者の作品に特徴的な〝太古の翁〟であり，人間の寿命を遥かにすぎたような，石のごとき表情と暗闇の底から燃えるような鋭い光を放つ眼孔を持つ老人である。彼は，主人公にその店にまつわる故事来歴と教えを語り，これからの行末に道を切り開く役割を演じる。

この老人は，既出の「青い花」に登場する老人クリングゾールを思わせ，その人物が主人公を導き，その内面の成長を促すと言う点で，エンデ作品のみでなく，ロマン主義の作品に重要な且つ典型的な登場人物であるとも

言えよう。その古老との出会いはシリルの内面を変える。老人と語るうちに，彼はドアに書かれた言葉の真義がわかるようになり，解答への道を見い出すことに自信を深める。まさに，自らの遺失物である対象に向かって歩みを加速させることになる。老人は遺失物の在処を知っているのではないか。そして，然り，それを保管しているのである。

しかし，老人はその在処を教えてはくれない。シリルは自分で見つけなければいけないのである。老人は，在処を教えることは神によって禁止されていると述べる。衆知のように，<Suchet, so werdet Ihr finden>は新訳聖書マタイ伝7章にある言葉である。作者は古老に次のように言わせている。

「この言葉は全く実在しない人が言った。が，皆は彼のことを信じていて，彼を探した。だから，彼は本当に存在するのだ」(27)と。ここで述べられているのは神であろう。つまり，信じ，探し求めることと存在はイコールの関係であると言う教えである。

このキリスト教的な考え方と同時に，ここで当然考えられるのは，探し求めるという心の動きは実在と重なるというロマン主義の理想である。ポジテイヴな信念，憧れは存在を創り出すのである。別の箇所で，「死ぬことが出来なければ，生きなければならない。それは，何を欲するかと言うことなのだ」(28)と。これは，生きることは欲し，探し求めることに等しいと，さらにリアルな形でロマン主義的な生き方を言い替えたと言える。また，「人間は全てを見つけ出す。なぜなら彼らはそれを探すから。そうやって，人間は全世界を創り上げた」，「人間はどこかに自分達が住むために世界を創った」(29)とその古老に言わせている。ここでは，世界の創造主を神ではなく，人間に置くことによって，作者のロマン主義的な傾向の強さを見ることができる。エンデは，他作品で，欲することが世界を創ると言うテーマを半分の限定をつけて掲げたが，ここでは，すでに暗示された対象を探し求めると言う内面化されたものとして提示している。

古老は大きな地球儀を指さし，残っているところはもう少ない，見つけたいなら，急がなければならない，と言う。そして，「山脈，海，島，大陸，もう全体に何か……。初めは全て空白だった。今，開いている場所はほんの僅かしかない。探すのなら，その一つを探しなさい」(30)と忠告する。シリルはヒンズークシ山脈の一角に小さな白い点を見つけ，「ここだ」と指さす。古老は頷く。

この古老との遭遇は，筋書きでは，幻想の中での出来事である。しかし，その直後，主人公の絵は彼のケースから消えていた。古老の示唆により，シリルは探求の地を特定した。それと引換えに消えた絵は，旅の守りであった存在から，彼の到達点に移動してシリルの到来を待つものに変わったと言える。

多くの犠牲と艱難辛苦を乗り越えて，シリルはあの絵そのものの微光を放つその城に辿り着く。外壁にしがみついて，不可能に近い方法で一センチメートルずつ上っていく。

何十年も後に，偶然道に迷い込んだ旅の一行が，月光に輝く虹色の城を，祭りが催されているように窓々が光り照らされているのを，そして，窓の一つに暗いシルエットで一人の人物が立っているのを，その手は挨拶をしているのか，拒絶をしているのかわからないが，ゆっくりと振られているのを，見たと報告する。

主人公の探し求めたものは，彼の長い旅の終着点は，以上のように人跡未踏の自然の中で，それと一体化することにあった。それが，人が故郷に対して抱く精神的な執着の念を持って，彼の憧れ求めた場所であった。初めそれが何であるか認識できなかった内的な動きは，古老の教えにより，シリルに認識できる世界になった。シェリングの言葉どおり，人間が認識する世界と自然界が完全に一致し，思惟の世界が自然界となるとき，人間の自然との結合がなされる。ここでは，時空を越えることで，神秘的要素が非常に強い。人間の魂は神の永遠無限の本質に達する認識を有するとい

うスピノザの言葉を引用し，「自己認識は永遠無限の存在に至る道だ」[31]と意味深く述べるのは，神秘思想家ルドルフ・シュタイナーでもある。

シリル本人には未知の，幸せな始まりがあったことが，この物語での「原初」の形であり，幼，少年時代の極度に偏った生活は，「原初」から発出した「分裂」の形である。そして，少女と会って，「故郷」の存在を知ることによって，彼の中で主観と客観が分裂する。彼の精神は彷徨するようになる。<絵>と出会うことによって，主観と客観の基本的対立は和解に向かい，つまり，「永遠の原初的な統一性」に向かって，分裂状態は収斂するようになる。<絵>は和解をもたらすための，一つの「衝動」である。矛盾を解決するための芸術家の「想像力」による作品であるともいえる。古老と出会うことによって，主人公は自己形成する。そして，万難を乗り越えて，求める城に終着する。まさに，疎外された自己から発出，分裂，迂回，上昇して，環帰し，最後に「他の中にいて自己のもとに在る（故郷にある）」ことを立証する。ここに，エイブラムズの述べるロマン主義の円環理論は見事に実践されていると言うことができる。

おわりに

自然と人類が一体に解け合って存在した太古の時代に対する憧憬が，エンデの創作姿勢の中に一貫して存在する。これは，近代自然科学の引き起こした人類の自然との乖離ゆえに，闇の中で手探りしていた19世紀のヨーロッパの代表的な知識人たちの姿勢でもあった。100年の隔たりを経てなお，人類が置き忘れられるのではないかと言う同じ不安は，人類の終局的な所属の場が何であるかを考えさせる。

内的な自覚を獲得することによって，つまり，螺旋状に上昇することによって到達する場所は，昔なつかしい場所，ロマン主義においては自然の中であるが，自覚した自己とその環帰した場との関係はもはや以前のそれと全く同じではない。より強い統一体として，ポジティヴな存在になるは

ずである。

エンデのこれまでの作品も螺旋状の円環構造を持つものが多い。しかし，そのなかで彼が提起するものは，より現代的な問題である。自然との一体化を望む姿勢は，地球の危機を警告するエコロジー問題に人々の目を向けさせる。自然の中に場を失ったら，人間は存在できない。そうした人類存続の危機を迎えている現代，ロマン主義文学，及び，それに連なる作品は，人間が自然の中の一員であることを熱っぽく，絶えず語りかけることによって，人類救済，エイブラムズの述べる“revelation”を目指すと言い得よう。

ロマン主義は，以上のように，人間と自然との共生のテーマと切っても切れない関連を持つが，しかしまた，「実存的な誠実さと根本主義的な神学的立脚点が失われている」(32)というカール・シュミット（Karl Schmidt）の批判に代表されるように，種々の批判も行われてきたのは衆知のことである。現代作家M. エンデに対しても同類の批判が向けられる可能性はある。しかし20世紀末という社会ではそれをどう照り返すのであろうか。ロマン主義の批判という窓口から同じ世界を考察してみるのも非常に魅力的である。次回に検討してみたい。

註：

(1) W. W. Norton & Comapany, New York, 1973
邦訳は，「自然と超自然ーロマン主義理念の形成」吉村正和訳，平凡社，1993年

(2) in Michael Ende, *Das Gefängnis der Freiheit*, Weitbrecht Verlag Stuttgart, 1992

(3) 吉村正和訳，前掲書解説参照

(4) ウロホロスはエンデの代表作 *Die Unendliche Geschichte* の表紙を飾ると同時に，物語中，主人公が飛び込むそのまた物語（二重構造）の本の表紙にも意味ありげに描かれている。

(5) カバラーはヘブライ語であり，ユダヤ教で聖書の密教的解釈を伝える秘密解義であるのに対し，ヘルメスは，本来，ペロポネソスの境界神であることか

らギリシャ神話を経由する。前者は聖霊との交感を重視し，後者はこの世とあの世の道行を案内するものとし，両者は後代互換性を持って考えられる。

(6) エンデのもう一つの代表作 *Momo* における主人公を助け導く亀のカシオペイアは自らの内に小宇宙を抱いている存在として，生物を宇宙全体に重ねる思考法が見られる。

(7) 照応関係という概念は，現実界と異次元との照応という観点で，エンデの思索の基本に流れているものである。
拙論「二つの世界とイノセンスの所在及びその意義ーエンデと賢治を巡って」横浜商科大学『紀要』第七巻を参照されたい。

(8) M.H.Abrams, *Natural Supernaturalism* p.174.
F.W.Joseph Schelling, "System des transcendentalen Idealismus", 1800, 邦訳「先験的観念論の体系」赤松元道訳，蒼樹社，1948年参照。またエンデはこの想像力をポエジーと言い変えて「自己のうちに世界を見いだす能力である」とし，それが新しい価値の創造をもたらすものであると述べる。
拙論「M. エンデ *Die Unendliche Geschichte* の意図せざる意図」商大論集第22巻，及び「社会と文学ーファンタジー文学の社会性または社会的意義」商大公開講座 8 『これからの世界と日本』を参照されたい。

(9) M.H.Abrams, a.a.O., p.185.

(10) F.W.Joseph Schelling, "Von der Weltseele", 邦訳「世界霊について」神林恒道訳，ドイツ・ロマン派全集第 9 巻『無限への憧憬』図書刊行会，1984年，105頁。

(11) F.W.Joseph Schelling, "Über das Verhältniss der bildenden Künste zu der Natur", 邦訳「造形芸術の自然との関係について」神林恒道訳，前掲書，278頁。

(12) M.H.Abrams, a.a.O., p.188.

(13) ibid., p.192.

(14) M.Ende, *Einer Langen Reise Ziel* a.a.O., S.6.

(15) ibid., S.6.

(16) ibid., S.S.15-16.

(17) ibid., S.17.

(18) M.H.Abrams, a.a.O., p.194.

(19) ibid., S.33.

(20) ibid., S.41.

(21) ibid., S.48.

(21) 拙論，前掲書「M.Ende *Die Unendliche Geschichite* の意図せざる意図」参照。

(23) 拙論，前掲書「二つの世界とイノセンスの所在及びその意義」参照。

(24) M.Ende, a.a.O., S.72.

(25) Rudorf Steiner, *Die Mystik im Aufgange des neuzeitlichen Geistes-lebens und ihr Verhältnis zur modernen Weltanschauung*, Berlin, 1901, 邦訳『神秘主義と現代の世界』西川隆範訳，白馬書房，1989年，31頁。

(26) idid., 邦訳29頁。

(27) M.Ende, a.a.O., S.78.

(28) ibid., S.78.

(29) ibid., S.81.

(30) ibid., S.82.

(31) R.Steiner, a.a.O., 邦訳22頁。

(32) Karl Heinz Bohrer, "Die Kritik der Romantik", in *Merkur*, 1988, 邦訳「ロマン主義の現代性ーその阻害の伝統について」，『ゲルマニスティクの最前線』，歴史と社会14，リプロポート，1993年，95頁。